

対談

資史料館の役割

繋がるための仕掛けとしての「余白」であること

Name

広瀬茂久(東京工業大学博物館 資史料館部門) × 多久和理実(未来の人類研究センター)



東京工業大学に資史料館ができるまで

多久和：今回、広瀬先生と対談したいと私からリクエストを出したのには理由がありまして。広瀬先生が東京工業大学の公文書室である資史料館で活動される中で、「今月の一枚」¹であるとか「とっておきメモ帳」²であるとか、大学に関連する情報を頻繁に発信されているんですよね。大学の歴史だけでなく、周辺の動植物であるとか、卒業生についての出版物であるとか、毎回「こんな話題が大学にあったんだ」という驚きを受けます。資史料館から発信するということに興味があって、その活動に至るまでの経緯を伺いたいと思いました。

広瀬先生、これまでのご研究と資史料館でのお仕事について紹介していただけますか。

広瀬：私のキャリアの概略も言ったほうがよいと思うんですけども、資史料館の仕事というのは定年になって、第二のキャリアのような形で始めました。その前はバイオ系のバリバリの研究者だったんです。

私は、この世に生まれたからには、「自然を読む」のが自分の仕事だと思っていて。本を読むとか、マンガを読むとか、色々あるけれど、「自然を読む」のが自分の仕事だと。定年まではそれに専念したいので、ずっとやっていたんですよ。ちょうど定年が近づいた頃に『130年史』³を出すことになって、現役の先生に編集委員を頼むの

は大変なわけですよ。

多久和：編集作業、大変そうですね。今日の講義「東工大のキャンパスに親しむ」の受講生たちも感心しながら『130年史』を読んでいる様子でした。

広瀬：結構大変なんです。編集委員は4人いて、そのうち3人は名誉教授の先生方で、編集委員長が小尾欣一先生、後は道家達将先生と中濱精一先生がおられて、3人でやられるのだと思っていたんですけども。『130年史』はバイオを新しく立ち上げたことがメインのテーマになるので、バイオ系をわかる人がいないとまずいということで、私が呼ばれたんです。

多久和：そんな経緯があったとは。

広瀬：現役の最後で研究をまとめることにプラスして、『130年史』をまとめなきゃいけないくて、結構大変ではあったんです。なんとか『130年史』を終えて定年になるという時に、道家先生から話があって、「広瀬さん、定年になった後どうするの」と言われまして。何も決まっていなかったんで、ちょっと考えて「英語の総説を書いたりして学会に貢献したいと思っているんですが」と答えたら、「どこにも決まっていないうら、学長に話をするので資料館を作る仕事をやらしてもらえないか」と言われて。

多久和：道家先生の鶴の一声で始まったんですか。

広瀬：鶴の一声に聞こえるんですけど、実際には事情があって。『130年史』を編集する中で、学部長とか研究科長に「その分野の歴史について何字以内でまとめてください」ってお願いするわけです。字数だけでは皆さんなかなか書いてくださらないので、見本を作って添えてお願いしたんです。

多久和：なるほど。部局史の記述のモデルを作っておいたんですね。

広瀬：そのように提案したんですけども、お願いされたほうは、歴史をたどろうにもデータがない。それで、編集委員会に「データがないのに突然依頼して、あんまりだ」と言うわけです。たしかに「あんまりだ」なんですよ。

それで、学長のところに道家先生や小尾先生が行って、「『130年史』は資料がない状態で編纂することになるので、これは大変ですよ」と言った。「『130年史』で痛い目に遭ったんだから、今後は資料館がないと一流大学とも見做されないし、やっていけませんよ」と言って、学長の決断を迫ったんです。当時の伊賀健一学長は、「資料館を作る」と返事をしないと編集委員4人とも辞めてしまいそうだと心配して。

多久和：『130年史』を作って欲しいから、編集委員を辞めさせないという理由ですか。

広瀬：そうです。学長の決断で作ると決まったわけですね。

私は定年なので（資史料館の部門長を）別の先生がやると思っていたら、先のように、道家先生から「広瀬さん、年史の経験もあるし、あなたしかいないから学長に推薦するのでやってちょうだい」と言われて、「じゃあ、やり

ます」となったわけです。それで「自然を読む」という本来の仕事は定年までできっぱり諦めて、大学に資料を残すという仕事で貢献することになりました。

資料を集めるだけでは別に私じゃなくてもいいんじゃないかという気がして、私が第1代の世話人に選ばれたのだから、何か変わったことをやりたいと思って。考えた末に、例えば「今月の一枚」とか、「蔵前ゼミの印象記」⁴とか、結構力を入れて作ってきました。

多久和：「蔵前ゼミの印象記」、OBの記録が面白いので読みました。

広瀬：定年後に大学に第二のキャリアとして今のパスを作ってもらったわけだから、貢献できるかなと頑張っているところです。

多久和：なるほど。公文書室としての資史料館の設置については、広瀬先生が『百年記念館設立30年記念誌』⁵に書いてらっしゃいますけど、設置に動き出した具体的な事情がわからなかったので、気になっていた謎が解けました。

私は学生として在籍していた時から、心配していたことがあったんです。東工大の『百年史』は通史と部局史の2分冊に分けて構成されていて読み応えがあるのですが、もう少し調べてみようとすると、記述の元になった資料にたどりつくのが難しいんです。元の資料が現存しているのか、一般の人がアクセス可能な資料なのか、わからないことも多い。なので、学部生の頃に『百年史』を見て、「これ以上の年史は書けないんじゃないか」と学生ながら勝手に心配していました。実際には、『130年史』は100周年以降の出来事を中心に構成して、画像を多く採り入れて、違う特色のある年史として発行されました。けれども、将来編纂される年史は、東工大側で保存している資料によって裏付けながらしっかり書けるのだろうかかと心配だったので、資史料館が設立されて資料を積極的に保存する流れになったことに安心しました。

広瀬：『百年史』から元の資料にたどりつけるかについては、あそこに資料の引用がいっぱいあるんですけど、それがほぼ全て失われているんですよ。

多久和：やっぱりそうなんですか。改めて聞くと悲しいです。

広瀬：年史を作るための重要な資料を百年史編纂室に集めますよね。それを基に、工学部の助手として雇われた人が専任スタッフとして文章化して、最終的に『百年史』の2分冊にまとめたんです。発刊された後、スタッフを引き続き学内で雇わなかったために、詳しい人がいなくなりました。集めた資料は工学部に残されていたはずですが、当時は資史料館がなかったので、人がどんどん入れ替わるうちに、古い資料は「もう『百年史』が出るから捨てていい」とまとめて処分したんじゃないか、というのが道家先生の話でした。

だから、「資料館がない状態で年史を出すと、年史以前の重要な書類を全て捨てることになりますよ」というのも、伊賀学長を説得した時の理由だったんです。

多久和：『百年史』の反省があって、『130年史』は大きな痛手を伴いつつ先例から学んだのですね。せめて資料の目録だけでも残っていれば、今からでもたどって収集できたかもしれないのに、本当に惜しいことです。

文字ではなくヴィジュアル重視の発行物を出す理由

広瀬：「今月一枚」の形式についても説明します。

バイオ系では研究が急速に発展していて、論文の数がものすごく多いんです。ちょっと話題になる分野だと、一年間で1000報とか2000報とか論文が出てくるんです。

多久和：先行研究のチェックだけでも追い付けないと聞きますね。

広瀬：そう、真面目にやっているとチェックできない。しかも、出版社やジャーナルの数も多いんです。ジャーナル自体がすごい競争をしていて、いかに読者の目を捉えてアピールして、「発信力が高いからこの雑誌に投稿しよう」と思わせる工夫をしている。その中で、他の分野にはないかもしれませんが、グラフィカル・アブストラクトという、概要とは別に、論文の要点が絵を見ただけでわかるものが要求されるようになりました。概要は、120単語から長くても180単語がバイオ系の標準なんですよ。

多久和：他の分野に比べて短いですね。

広瀬：短いでしょ。その中に言いたいことを埋め込むのは力が要るんです。それでも、バイオ系の人たちはみな、短いんですけど読みこなすのが大変だと言うんですね。最終的に出版社が考えたのは、グラフィカル・アブストラクトという、論文に書いてある要点が絵を見ただけでわかるものだったんです。

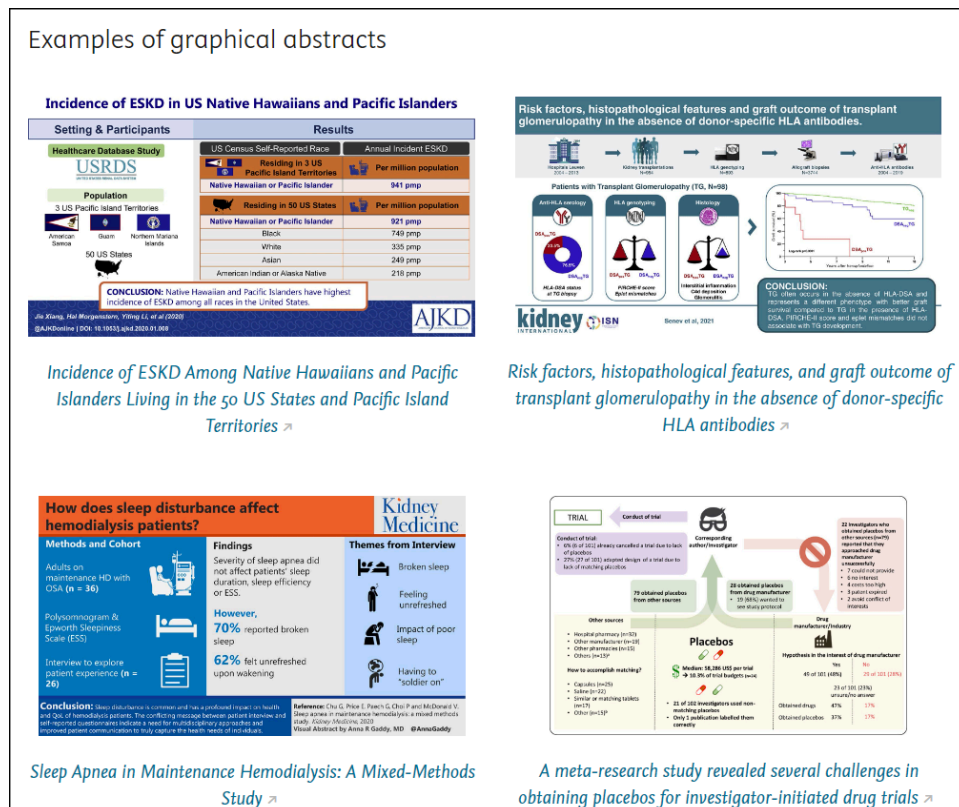


図 1. エルゼビア社が示すグラフィカル・アブストラクトの例⁶

多久和：視覚的に訴えられるアブストラクトを提示するわけですね。

広瀬：そうです。それをちょっと真似したんです。みなさんに話題を提供する時に、文字だけでは興味をパッと捉えられないという印象があったので、写真とかイラスト入りで注目を引くようにした上で、中身も飽きさせないようにしたい、と始めたのが「今月の一枚」です。

多久和さんは興味を持って評価してくださってますけど、実は賛否両論がありまして。

多久和：そうなんですか。

広瀬：博物館はやっぱり格調高く、主義主張があって見せるという努力をしているところなので、あまり主張がなさそうな話題を毎月苦し紛れにポンポン上げるとするのは、博物館の顔を潰すんじゃないか、という話もあります。なかなか賛否両論ではありますけれど、何も声を上げないよりは話題になるほうがよいかとちょっと無理をやってきました。

多久和：「今月の一枚」は大きく印刷して、百年記念館や附属図書館の入口にポスターのように貼ってありますよね。立ち止まって見ている学生さんを目にするので、画像で注意を引いて簡単に読めるような説明文、という形式はバランスがいいなと思っています。歴史を研究しているとつい文字を書き過ぎてしまうのですが、あれくらいの分量だからこそ、今月の話題としてスッと入って来ます。

広瀬：好意的に受け止めてもらえる大変嬉しいし、やりがいがあります。100回を目標に、回数を重ねてきました。



図2. すずかけ台キャンパス G5 棟 7 階にある資料館と「今月の一枚」の展示

多久和：発行は2017年7月からですか。

広瀬：インターネットに上げ始めたのは2017年7月ですけど、それは後からなんです。ネットに上がってないもの(2015年5月から2017年6月)を含めると、結構な数になります。私の二度目の定年までに100回は届かなかったですが。

多久和：先ほど、博物館がある意味で格調高いという話題がありました。博物館の展示って、ある程度の期間しっかり調査して、その結果としてフィックスしたものを出すので、「今月の一枚」とは性質が違いますよね。「今月の一枚」は、例えば、今見られる花とか、今飛んできた鳥とか、そういう時事の話題も取り上げています。何年も「今月の一枚」が発行され続けたことによって、「実は数年前にはこんなことが話題になっていた」とわかって面白いです。時間が経過すれば当たり前ではなくなってしまうので。新鮮さのほうを重視するために、蓄積されるとより面白味が出てくると私は感じています。

動物生理学の研究者が博物館の資史料館部門長になったいきさつ

多久和：冒頭で、「自然を読む」という活動を定年後もやろうと考えていた、というお話がありましたけれども、元々の専門は動物生理学なんですよ。

広瀬：はい。

多久和：博物館の歩みを見ると、例えば、2007年の特別展示「進化するスーパーバイオワールド」の実行委員長をされていたりして、広瀬先生は専門分野の研究者でありながら博物館と積極的に関わってきた方のように感じます。これまで博物館や資料とどういう接点を持っていたらっしゃったんですか。

広瀬：そうですね。博物館自体は、学内措置として博物館として運用していた時期の後、公的に博物館を名乗ることができるようになりました。

多久和：2011年3月の博物館相当施設の指定を受けたことですね。

広瀬：そう、認定を受けたんです。それ以前に学内で博物館と呼んでいた頃には、博物館にあまりスタッフがなくて、何かやろうとすると各部局に声を掛けて、「こういう展示をやりたいので協力してください、宣伝になりますよ」と頼んでいたんです。当時は6つの類に加えて7番目の類としてバイオ(生命理工学部)が新設されたので、類ごとにひとつずつ展示を担当して回すことを道家先生が考えました。

多久和：なるほど。類ごとに企画展を担当すれば、東工大の中を網羅的に紹介したことになるのですね。

広瀬：当時は大学のイベントがそんなに盛んではなかったためか、非常に注目されて、やりがいがあったんですよ。今はイベントの数が多いので、上手にやらないと頑張ったわりには評価されないし人も来ないという状況になりがちですけども。あの頃は大学の主要なイベントで、部局にとって頑張りがいがあったんです。

バイオに声が掛かった来た時にたまたま私が研究科長をしていたので、道家先生がすずかけ台まで来られて、「広瀬さんお願いなんだけど」と言われて。「ちょうどいい順番だからやりたい」というだけでなく「相澤益男先生が学長だったので、学長の任期のうちにやって花道を飾りたい」と言うので、「ぜひやります」と引き受けたんです。

多久和：相澤先生は生命工学がご専門で、2007年まで学長を務められたんですね。

広瀬：そうです。もう、研究が忙しいとか研究科長が忙しいとか言えなくて。相澤学長の花道だって言うし、7類バイオ系がこれから東工大で存在感を示すにはまたとない機会なので、やるからには総力を挙げてやりましょうと教授会でみなさんにお願ひしました。

その時には結構立派なしっかりした展示会ができました。理由としては、当時まだ技術職員の方たちが今のようには統合されていなくて、バイオ系には当時5人か6人の技官と呼ばれた技術職員の方が張り付いていたんですね。その人たちに「悪いんだけど、バイオ展をやるので通常業務と並行して手伝いをして欲しい」と頼んで、研究室の負担を極力減らしつつ内容を濃くすることができました。他の部局からも盛んに見に来てもらったし、近所の子どもたちも何回も来てくれましたね。私なんか張り切って、遺伝子工学で赤いメダカと緑のメダカを見られるようにしたりしました。タイミング的によかったし、技術職員の方がかかりっきりで面倒を見てくださるなど条件が重なったので、やりがいがありました。

多久和：博物館との接点の始まりは、企画展をやったタイミングで研究科長されていたことなんですね。それをきっかけに『130年史』にも関わることになったんでしょうか。

広瀬：私は道家先生の化学史の講義を学部の時に受けていたんですね。だから、道家先生に頼まれれば「NO」とは言えない立場なんです。それだけではなく、研究科全体のみなさんの力を借りて予想以上に盛り上がったという経験があって。「みんな力を合わせればこんなすごいことができるんだ」と思ったんです。リーダー役というのは恐れた表現ですけど、研究科長というのは、そんなに才能がなくても、みんなをちょっと上手にまとめる力があれば出来るもんなんだなと。

多久和：広瀬先生は幅広い人脈を持っていらっしゃるし、人と人とを繋いでいく力が本当にすごくて。新規科目を立ち上げた時に、私のような人間が思いつきで呼び掛けてもなかなか情報や人が集まらなかったんですが、広瀬先生に仲介していただいたら、相応しい情報提供者や講演の担当者がどんどん見つかりました⁷。本当にお世話になっています。きっと企画展でも、その力を発揮されていたんですね。

広瀬：そう。だから、多久和さんが聞き出したい企画力とかね、残念ながらそういうものが私にあったわけじゃないんです。たまたま、周りの人たちを一つの流れにまとめられたんです。それで道家先生が感激して、自分でも変だけど、道家先生に見込まれたというのもあって、『130年史』編集委員に引っ張られて、それが終わったら「資料館やってくれない」って頼まれたという気がします。資料館業務に才能があったというよりは、人をちょっとま

とめるのが上手そうだなと先生に見込まれた、というのが正直なところですかね。

多久和：お話を伺っていると、道家達将先生の存在がとても大きいですね。

大学のやわらかい窓口として問い合わせに対応する

多久和：現在の資史料館の利用のされ方について教えてください。私は自分の講義で紹介したい東工大関連の人物がいたら、資史料館に連絡して資料を閲覧させてもらっています。学内外からの問い合わせには、主にどのようなものがありますか。

広瀬：今は博物館と資史料館は、はっきり分かれているわけではないんです。学外の方から問い合わせが来る場合は、広報課から入ることが多いです。広報課からすぐ博物館・資史料館に「こういう問い合わせがあるので対応可能ですか」と連絡が来ます。こちらで調査して、回答したり「こういう資料があるのでいつおいでください」と伝えたりするのが今の主たる流れです。問い合わせしてくる人たちは、結構調査能力があります。色んな場所で調べて、それでもわからないと最後に東工大に訊いてくるので、難しい調査が多いんですよ。簡単に調べられる場合には、資料をこちらで調べてPDFを送ってあげるようにしています。大変そうだったら直接来てもらっています。長いこと半年ぐらい週に1回通って資料を撮影している人もいて、将来まとめて論文を書きたいと仰っている方もいます。そういうサービス業務がかなりの部分を占めています。

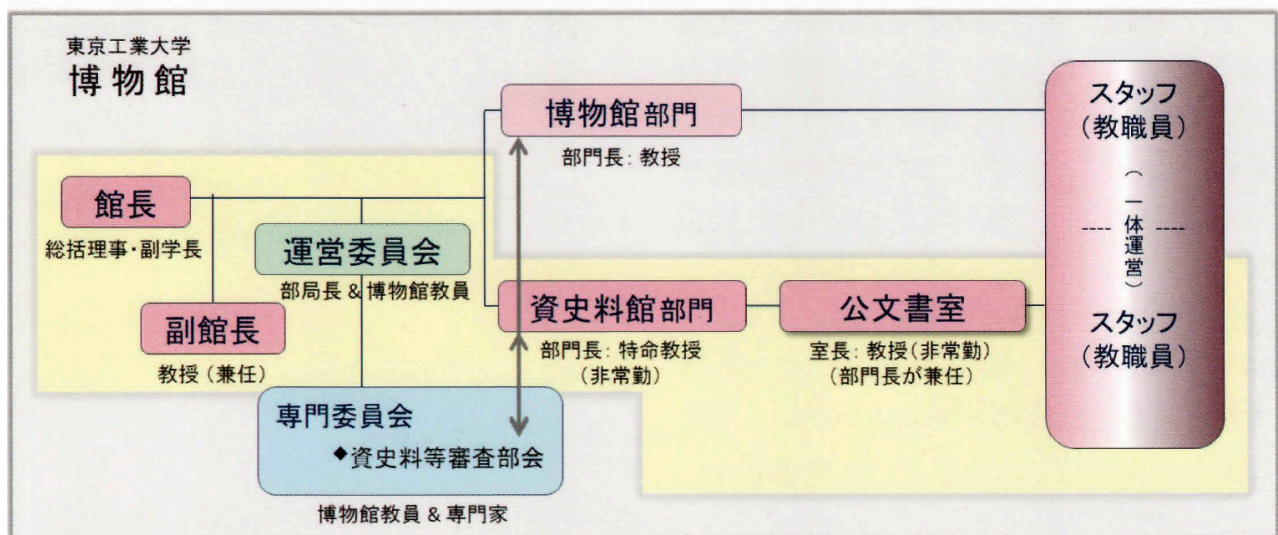


図3. 東京工業大学博物館（資史料館部門 公文書室）の組織図⁸

資史料館は本来、大学全体から貴重そうなものを集めて、その中でさらに重要なものを特定歴史公文書⁹として公文書室に入れて、半永久的に保存するのが文面上の重要な任務となっています。けれど、今のところは、業務の時間からすると1/10とかそんなものです。法律で決まっていることで、手順も決まっているので、限られた時間でもやっていける。残りの大部分は、自分たちの持っている資料を活用して、何かみなさんに知らせたい情報を発信するとか、あるいは、問い合わせに対して答えるとかいう感じです。

だから、多久和さんなんかから問い合わせがあると、スタッフの渡辺菊乃さんが張り切って調べてくれて、答えるとすごい満足感があるわけです。不思議なもので、私もそうなんですけれど、相手が知りたいことがパチッと嵌っ

て答えられると、満足感というか、「役に立っている」という感覚が凄く嬉しいですね。

多久和：問い合わせが来た時にどのように受け止めていらっしゃるのか、今まで知りませんでした。

広報課を通すのは、他の場所で調査を済ませてから調査申込をしたり、組織として問い合わせしたり、オフィシャルな依頼が多いと思います。一方で、私のところには、もっとカジュアルな、例えば、「気になっている歴史上の科学者が東工大の卒業生あるいは先生なんだけど、東工大にもう少し詳しい資料がないかな」くらいの相談が来ると。そうすると、資史料館や博物館に問い合わせすれば詳しい資料があるかもしれないんですけど、あまりにも曖昧模糊とした状態で問い合わせを勧めてしまうと、お仕事を増やしてしまうのではないかと心配していました。そのような、「ちょっと資史料館に行ってみようかな」という軽い相談が来た時には、悩む部分があったのですが、対応することで満足感があるという話を聞いて安心しました。

広瀬：資料館をせっかく作っていただいたので、問い合わせに対してはできるだけ私たちのほうで対応するようにしています。そうすると、今まで問い合わせに対応してきた大学事務の仕事が減って時間が浮くわけですね。事務にも「資料館ができてよかった」と思ってもらえるんじゃないでしょうか。全国的に問題になっていることですが、色んな人が大学の事務に問い合わせするので窓口が忙しくなってしまうと、問い合わせが来ても、「そういうことにはお答えしないことになっています」とか言って、切ってしまうがちなんです。個人情報保護の言い逃れしやすいので、それを理由に挙げたりします。

事務に問い合わせ、事務が答えるような方式にすると、みんな切られてしまう。切った本人は仕事が減るからよいかもかもしれませんが、大学の評判を落としてしまうんですね。少し前に有名な話があって、当時の助教授の先生が本を出版する時に、最終稿を仕上げたから出版まで間があったので、ひょっとしたら肩書が教授になっているかもしれないと思った編集者が某大学に電話をしたそうなんです。「この先生が教授になったかどうか教えてもらえませんか」と訊いたら、「そういうことは個人情報なのでお答えできません」とガチャッと切られたそうです。こんなことを繰り返していると、大学としての評判が落ちますよね。最終的に答えられなくても、相手が気分を害さないように対応する必要があります。

例えば、卒業生のご子孫やご家族の方からの問い合わせに対して丁寧に答えると、すごい感動してくれて、「うちの先祖がお世話になった大学だから」と寄附をしてくださる場合もあります。対応という意味では、資料館や博物館が、なるべく事務の代わりをして、対外的なやわらかい窓口になりたいというのはありますね。

多久和：社会に見える大学の印象にまで気を配っているのに感激しました。対応には時間がかかるものなので、ある程度の省エネはやむを得ないのかなと想像していました。

卒業生の記録の話が出ましたけれども、私の研究室には昨年度、明治時代に東京工業学校で学んだ中国人留学生について修士論文を書いた学生がいました。彼女がテーマを絞り込んでいく段階から、広瀬先生や大学史を研究している先輩方に助言をいただき、本当にありがたかったです。私自身は、資史料館や博物館が収集している資料を活用して、卒業生個人の足跡がたどれるような研究が増えて欲しいと願っていて、学生にはケーススタディーを勧めていました。ただ、一次資料がどの程度存在するのかわからない状態でケーススタディーを始めるのは、科学史に取り組んだばかりの学生にはハードルが高いです。ここ数年で資史料館の整備が進み、明治から昭和初期にかけての成績表が特定歴史公文書として目録に記載されたり、古い卒業アルバムがデジタル化されたりしました。最近の活動があったからこそ、学生が「これならできそう」と思ってケーススタディーに進んでくれました。ここ

数年で加わった資料の量だけを見ても、研究に使える宝の山があって、自分が学生として過ごしていた頃と全く状況が変わったと感じています。

広瀬：そういう意味で、資料に対するアクセスは極力バリアを下げておきたいというのが私の考えです。文書の管理規定とか色々ありますが、元の文章を読むと、今の大学の事務が取っているほど厳しい管理が要求されているわけじゃないんです。忖度をして、厳しくしている。誰に対して忖度しているかというと、国民に対して忖度しているわけじゃなくて、自分の上司に対して忖度している場合が多いことが、定年後 10 年近くこの世界で働いてよくわかりました。そんなバリアは下げた方がいいかと、現在説得して色々やっているところです。

生物に進化と調和（オーケストレーション）をもたらす「余白」

多久和：今回のオンラインジャーナル『COMMONS』は、「余白」がテーマです。未来の人類研究センターでは利他について考えるプロジェクトが進められていて、利他が生じる場には、他者の行動を受け入れたり変化を促したりする、余裕のようなものがあることが議論されてきました。その中で登場したキーワードが「余白」なんです。

私は、資史料館で行うような資料保存の活動には、文章を書いた人の意図からも、資料を寄贈した人の意図からも離れて、後世で異なった物語を描き出す可能性をもつ「余白」があって、それが活動の面白さの 1 つだろうと考えています。

以前メールをやり取りした際に、広瀬先生は生物学において調和（オーケストレーション）を大切にされていて、それが「余白」の理解に通じると仰っていたので、詳しく聞かせていただけませんか。

広瀬：テーマの「余白」について、ウェブサイトを読ませていただきました。

多久和：今号のコンセプト説明を読んでもらったんですね。ありがとうございます。

広瀬：例えば、アルファベットの単語をスペースなしに続けて書くと意味が取りにくいけれども、単語の間にちょっとスペースを入れると読みやすくなる。さらに、句読点を入れると、もっと読みやすくなる。要するに、余白の役割を高めていくんですね。単純な余白だけでなく、コンマを入れたりセミコロンを入れたりするのは、余白の価値を高めるひとつの工夫だと思います。余白を活用しながら、情報を高度に素早く伝えることを可能にしているのが、みなさんが仰っている「文章における余白」です。あるいは、人と人との会話の間など、余白には色々例がありますね。これは、生物が複雑で多様な機能を制御し調和を保つ仕組み、さらにはそれを進化させていく仕組みとそっくりなんですよ。

例えば、遺伝子にはエキソンとイントロンというものがあります。DNA の塩基配列のうち、タンパク質合成に関する部分がエキソンで、それ以外の「のりしろ」のような部分がイントロンです。転写の時には、遺伝子を全部一回読むんですけど、タンパク質合成に関する情報の部分だけを抜き取って、情報がない部分を切り捨てていくんです。そうすることによって、効率よくタンパク質を作ることができる。でも、遺伝子として情報を蓄えておく時には、縮めたものではなく、余白を入れて蓄えておく。遺伝子を進化させる時には、組み替えますよね。遺伝子が「A-余白-B-余白-C」のような構成だとすると、可能性としては、A と C を直接繋げて B を飛ばすこともできるわけです。

そうやって生物は進化の道をたどってきているので、生物の仕組みって、人文・社会科学系の方々がイメージしておられる「余白」の世界と同じなんです。

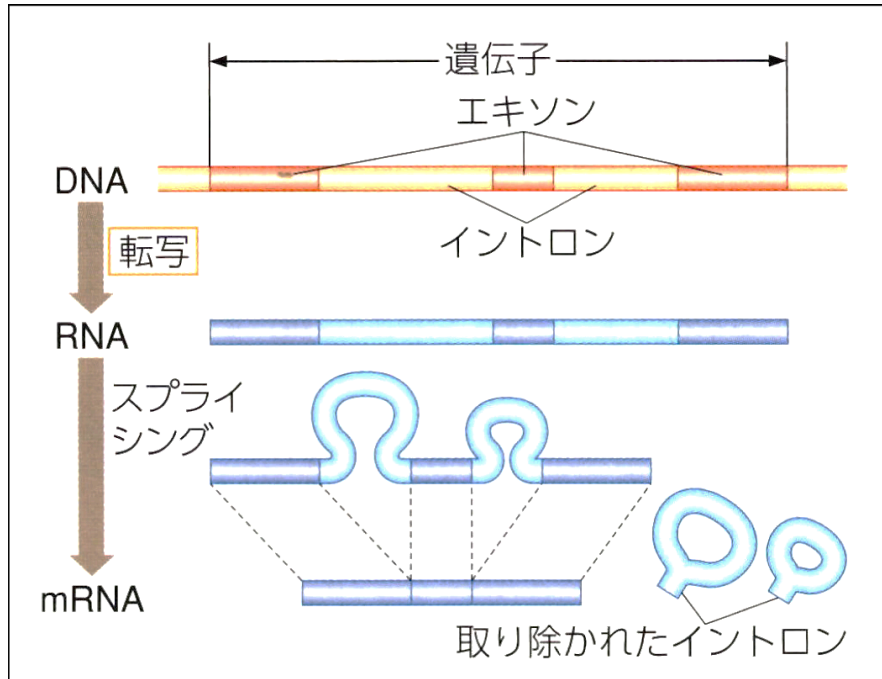


図4. 生物の中にある余白である遺伝子のイントロン¹⁰

何十兆個もの細胞で私たちは構成されているので、それらを統一して環境に適応したり進化をしたりするためには、余白の効用が必要なんです。余白がなければ、とてもここまでの人間はできません。独立したものが勝手に動いてはまずいので、調和して動くように、神経系とかホルモンなどが働いていますよね。例えば、脳はニューロンという神経細胞で構成されていますが、それら自体は独立していて、繋がっていないんです。必ず余白を持って配置されていて、余白を通して情報のやり取りをしています。情報を速く伝えたり、情報を伝えた後にすぐ消したりできるのは、余白のおかげなんです。

多久和：確かに。いったん消さないと、色々な情報を次々と送ることができませんね。

広瀬：そうそう。だから、必要な時間だけ情報を伝えて、必要な仕事が終わったらその情報が伝わらないようにする仕組みを取り入れるには、生物も構造上の余白を持つことがポイントになるわけです。

多久和：なるほど。余白の部分を含めた、生物を統一する仕組みとして、調和（オーケストレーション）という言葉も挙げてくださったんですね。

広瀬：そうですね。私たちの社会は、世界には70億の人間がいて、個人の人間の中には何十兆個もの細胞があって、それだけの複雑なものを、調和をもって動かしているんです。余白なしには動かせない気がします。これが、今回のテーマの「余白」と、生物の根本にある設計思想に通じるものがあると感じている理由です。

繋がるための仕掛けとしての資史料館、そこから始まるサイクル

多久和：最後にぜひ伺ってみたい内容をひとつ訊かせてください。

今年度から新規開講した「横断科目：東工大のキャンパスに親しむ」という科目では、それぞれの視点でキャンパスを紹介するレポートを、ヴィジュアルで伝わるように作成してもらいました。レポートの形式は、広瀬先生が「今月の一枚」などで実践している、その時その時の記録を文字あるいは画像にして残すという活動に着想を得ていて、受講生に記録する側、発信する側に回って欲しいというメッセージを込めています。

広瀬先生が資史料館でお仕事をされる中で、科目の受講生やそれ以外の東工大で活動する方々に対して、何か期待することやメッセージはありますか。

広瀬：そうですね。今年の教養卒論発表会で発表した学生のうち1人は、資史料館に来て色々と調査していたんです¹¹。

多久和：昨年度の3年生の必修科目「教養卒論」で優秀賞を受賞した、佐藤隆さんの「大岡山周辺の遺構について」という論文ですね¹²。

広瀬：そうです。対応の仕方には2つあって、1つは「それは授業の課題なんだから自分で調べて」と言って、門前払いにする。もう1つは、私たちがやっているように、「そういうの面白いね」と言って、できるだけ本人が使えるような資料を探す手伝いをして、本人が発掘をしていってまとめて書く。もちろん、授業の一環だからコメントも手も入れないですけど、完成したものを読ませてもらって、「よく調べたね、こういうのが優秀賞に選ばれたらいいね」と話していたんです。

この例のように、資史料館が使って、ある程度協力してもらえると道が、学生さんに浸透して欲しいと思っています。そうすれば彼らが社会に出た後も、大学のことに常に興味を持っていてくれて、例えば、東工大のウェブサイトを見に来るとか、そういう習慣ができれば、大学としてもよいことだと思うんです。学生と大学との繋がりを強固にする手伝いをするというのが、私たちの任務であり、特権というかやりがいだと感じています。

「東工大のキャンパスに親しむ」でも面白いレポートが出てきそうですね。そういう、みなさんが大学に軽い愛着を持つお手伝いができれば、博物館や資料館は大学として存在価値があると大学の執行部にも考えてもらいたいです。執行部に対しては、「博物館や公文書室のような文書を後世に残す仕組みがない大学は、国際卓越研究大学に応募する資格がないんじゃないですか」とか言っています。でも、そのように無理に自分たちの存在価値を訴えるよりは、先の例のように授業を介して学生さんと繋がりができて、大学が発展していくきっかけになればいいと思っています。

そういう意味では、資史料館は「余白」に当てはまりますね。1つ1つ独立したものが繋がってはじめて何か新しいものが生まれますが、繋がるための仕掛けが「余白」なんです。繋がり方は、AとBが繋がることも、AとCが繋がることも、A-B-Cが繋がることもあるし、時代によって違うかもしれない。繋がり方は違っても、将来の展望を切り開いていく手伝いができれば資史料館としては幸せです。

多久和：繋がるための仕掛け、ですか。人と人が繋がる仕掛けかもしれませんし、情報と情報が繋がる仕掛けかもしれませんね。よい言葉をいただいたので、見出しに使わせてください。

大学に関する調査をして、記録して、発信するというサイクルが回りつつあることが素晴らしいなと思っています。現在「教養特論：大学史」という科目で手島精一について講義されている橋本真吾先生も、大学院生時代に資料館で調査したことがきっかけで2018年から大学史の授業を担当するようになったと聞いています。学生時代に調査をした経験が、その後の仕事に繋がるというサイクルの例ですね。

広瀬：そうですね。公文書室というと、アーカイブズ学を専攻したアーキビストが仕切るというのが国際標準になっています。私はバイオ系の出身なので、アーキビストから見ると、資料を整理して後世に残すという仕事については素人なんです。そういう仕事については、渡辺さんなどの専門家に頼って任せています。でも、大学において資料館の役割を果たすという意味では、貢献できていればいいなと思います。

多久和：広瀬先生が活動を発信してくださることで、学生は「背中を見て学ぶ」ことができます。東工大にはアーキビストや学芸員の養成課程があるわけではないので、資料を収集したり保存したりする仕事を、「自分とは違う世界だ」と感じがちです。でも、そうではなくて、「自分が記録を作ったり、保存したり、発信したりする側になるんだ」という意識を持って欲しいんですよね。将来科学者やエンジニアとして活躍していく学生さんたちが、卒業後に大学のことに関心を持ち続けたり、資料を寄贈してくれたり、という長い時間のサイクルを考えると、広瀬先生が背中を見せてリードしてくださっているのは、私を含めて、東工大にいる人々にとってありがたいことです。

構成：多久和理実

¹ 「今月の一枚」は東京工業大学博物館の Facebook ページで公開されている。

<https://www.facebook.com/tokyotechmuseum> (2023年1月10日閲覧)

² 「とっておきメモ帳」は資料館のホームページで公開されている。

http://www.cent.titech.ac.jp/Publication_Archives/pg701.html (2023年1月10日閲覧)

³ 『東京工業大学 130 年史』および過去に発行された年史は東京工業大学博物館のホームページで公開されている。

<http://www.cent.titech.ac.jp/TokyoTechHistoricalDocument/TokyoTechAnniversary/Anniversary.html> (2023年1月10日閲覧)

⁴ 「蔵前ゼミ印象記」は生命理工学院のホームページで公開されている。

<https://www.bio.titech.ac.jp/event/kuramae.html> (2023年1月10日閲覧)

⁵ 広瀬, 2019, pp.78-82.

⁶ Elsevier 社による Graphical abstracts の説明と例。

<https://www.elsevier.com/authors/tools-and-resources/visual-abstract> (2023 年 1 月 10 日閲覧)

⁷ 広瀬茂久先生をはじめ東京工業大学博物館・資史料館の協力で実現した「横断科目：東工大のキャンパスに親しむ」で取り上げたテーマと講演については、ハイライト動画を公開している。多久和, 2022.

⁸ 広瀬, 2019, p.81.

⁹ 平成 27 年度以降に特定歴史公文書等として受け入れた資料については、資史料館のホームページに目録が公開されている。

<http://www.cent.titech.ac.jp/indexArchives.html> (2023 年 1 月 10 日閲覧)

¹⁰ 嶋田ほか, 2017, p.109.

¹¹ 2021 年度「優秀賞受賞者による教養卒論発表会」の様子は東工大ニュースで紹介されている。

<https://www.titech.ac.jp/news/2022/065344> (2022 年 12 月 12 日公開)

¹² 2021 年度の教養卒論優秀賞の論文タイトルはリベラルアーツ研究教育院 News で紹介されており、論文はリベラルアーツ図書室で閲覧可能。

https://educ.titech.ac.jp/ila/news/2022_04/062345.html (2022 年 4 月 26 日公開)

参考文献

嶋田正和ほか (2017) 『改訂版 生物』数研出版

多久和理実 (2022) 「あなたはいくつ知ってる?! キャンパスの魅力を発見する 10 テーマ 横断科目「東工大のキャンパスに親しむ」のハイライト動画を紹介」リベラルアーツ研究教育院

https://educ.titech.ac.jp/ila/news/2022_10/063008.html (2022 年 10 月 19 日公開)

東京工業大学編 (2011) 『東京工業大学 130 年史』東京工業大学発行

広瀬茂久 (2019) 「資史料館部門と公文書室の設置」『東京工業大学百年記念館 設立 30 年記念誌』東京工業大学博物館発行, pp.78-82.